

ハシモト エリコ

氏名（本籍） 橋本 エリ子（熊本県）

学位の種類 博士（音楽）

学位記番号 博音第24号

学位授与年月日 平成8年3月25日

学位論文等題目 <演奏曲目> オットリーノ・レスピーギ作曲「4つのトスカーナ
地方のリスベット」他
<論文> 演奏家の立場における「近代イタリア歌曲」の演奏
解釈論
—オットリーノ・レスピーギの作品を中心に—

論文等審査委員

（総合主査）	東京芸術大学	助教授	（音楽学部）	峰村 貞子
論文審査会（主査）	”	教授	（ ” ）	角倉 一朗
（副査）	”	”	（ ” ）	鈴木 寛一
（ ” ）	”	”	（ ” ）	高橋 大海
（ ” ）	”	助教授	（ ” ）	峰村 貞子
（ ” ）	”	”	（ ” ）	三林 輝夫
（ ” ）	”	講師	（ ” ）	畑 瞬一郎
演奏審査会（主査）	東京芸術大学	助教授	（音楽学部）	峰村 貞子
（副査）	”	教授	（ ” ）	鈴木 寛一
（ ” ）	”	”	（ ” ）	佐藤 眞
（ ” ）	”	”	（ ” ）	角倉 一朗
（ ” ）	”	助教授	（ ” ）	三林 輝夫

（論文内容の要旨）

本論文は副題の示す通り、オットリーノ・レスピーギ（Ottorino Respighi, 1879-1936）の歌曲作品を中心とした「近代イタリア歌曲」の演奏法と解釈を、演奏家の立場から考察したものである。

レスピーギの生活や作品といった伝記的なことではなく、彼の作品や内面を探ることで歌曲を全作品の中に位置づけ、社会情勢、詩人との関わり、そして同時代の作曲家との交友から、より本質的なレスピーギ像を浮かび上がらせることに努めた。つまり、近代イタリア歌曲の研究をするにあたって、歌曲の神髄に触れ、イタリア独自の歌曲の本質に迫ることを目標としている。従って、何よりも演奏家として、作曲家の意図した方向での演奏解釈を行うことを最大の課題とした。ゆえに、詩の内容と密着した表現、そしてその作品の精緻な理解と把握力をもって演奏に臨むため、長年にわたって改訂されないままになっている文献の歌詞対訳の誤りを指摘し、時間と

スペースの許すかぎり対訳を掲げることにした。このことにより、詩の内容を十分に理解し、詩のもつ詩想を深く洞察することはもちろんのこと、詩想と一体の楽想を音へと導くイメージ化に結びつけることができよう。

論文の構成は、序文、本文5章、結び、そして付録としてレスピーギの生涯年表、歌曲以外の作品表を掲げている。

序文では、本論文の目的及び従来の研究について述べ、近代イタリア歌曲が演奏される機会が増えているにもかかわらず、近代イタリア歌曲に関する研究が進んでおらず、参考となりうる文献が既存していないという現状と、そして今まさに、演奏と表裏一体をなす文献の必要性があることを説いている。

第1章では、レスピーギの人物像に迫り、レスピーギの妻であるエルザ・レスピーギの回想録及びライ・イタリア放送協会出版による「オットリーノ・レスピーギ」に基づきながら、これまで多分に曖昧であった人物像を彼の書簡および妻エルザの回想録により解明し、そして生涯にわたって続いた広範囲で旺盛な好奇心が、彼の音楽作品の根底に流れ続けていることを示唆した。

また、レスピーギを取り巻く環境と彼の作曲活動にはかなり強い関連性がみられることから、以下4節を設定し論じている。第1節ボローニャにおける若年期(1879-1907)、第2節ベルリンでのピアニスト時代(1908-1912)、第3節サンタ・チェチーリア音楽院の作曲科教授時代(1913-1917)、第4節エルザ・オリヴィエーリ・サンジャコモとの結婚および完成期(1918-1936)の4期に区分し、ボローニャ、ロシア、ベルリン、ローマと環境を変えていくことで、彼の作風に変化が生じていることを本論の論証にて裏づけした。

次に第2章では、レスピーギの歌曲作品に焦点を絞り、ここでは以下6節を設定し検証することにした。まず第1節では現在もなお未知とされている。歌曲作品の作曲年代および出版年代を明示する歌曲作品年表を掲げ、歌曲はレスピーギが生涯の伴侶とした音楽形式であることに言及した。また、19世紀オペラ一辺倒になっていたイタリア音楽の中で、イタリア独自の近代歌曲創造に、大きな貢献を果たしたレスピーギの作風の変遷について考察している。第2節では、オーケストラつき歌曲作品の創作状況および楽曲分析、第3節では、レスピーギの近代イタリア歌曲創造のインスピレーションとなった詩との接点を検証した。つまり、メロディ本位でオペラの断片にしかすぎなかったものから、詩の内容と密着した音楽表現を第一義とする作品へ移った背景を探ることを目的としている。そして、詩そのものが作曲家の創意を刺激するような力をもっていることをダンヌンツィオ(Gabriele D'Annunzio, 1863-1938)との接点から論証した。以下第4節では、レスピーギの歌曲作品における演奏法と解釈、第5節では歌詞対訳を掲げている。

第3章では、アルファーノ(Franco Alfano, 1875-1954)、第4章では、ピッツェッティ(Ildebrando Pizzetti, 1880-1968)に焦点を絞って考察した。つまり、同時代の作曲家の作品を分析することにより、レスピーギの作風についての、より詳細な解明を目的としている。最後に第5章として、そのほかの同時代の作曲家による作品の歌詞対訳を掲げ、レスピーギと同時代の作曲家との比較・検証をおこなった。

結びでは各章の成果を要約し、結論を述べ、今後の研究課題について言及している。